

—◆—演奏会情報—◆—

2012. 6. 22 (金) 大阪交響楽団第 167 回定期演奏会

(会 場) 大阪 ザ・シンフォニーホール

(曲 目) [1] ヨハネス・ブラームス ハイドンの主題による変奏曲
[2] エルンスト・フォン・ドホナーニ
ピアノと管弦楽のための童謡主題による変奏曲 ※
[3] ヨハネス・ブラームス 弦楽五重奏曲 (弦楽合奏版) 第 2 番
[4] ヨハネス・ブラームス 11 のコラール前奏曲から第 7 曲、第 8 曲

(指 揮) 寺岡 清高

(管弦楽) 大阪交響楽団

※ (ピアノ) クリストファー・ヒンターフーバー

—◆—鑑賞記—◆—

[はじめに]

大阪交響楽団の常任指揮者・寺岡清高氏の「ブラームス探訪」のシリーズ第 3 弾。

残念ながら、これまでの 2 回とも、わたしはあまり満足していなかったもので、今夜の演奏会も余り期待せずに出かけた。寺岡氏と大阪交響楽団の相性は、少しずつ良くなってきているとはいえ、弦楽重奏曲の合奏版に対してわたし自身、やや物足りなさを感じていたことが、そのきっかけと言えよう。

さて、今夜はどんな演奏になったのか。ブラームスの世界を一緒にお楽しみいただければ幸いだ。

[1] ヨハネス・ブラームス ハイドンの主題による変奏曲

こちらの曲は、良く取り上げられるので、耳にされたことがある方もいらっしゃるかもしれない。広がりのある主題に始まり、ハイドンの繊細なというか、バロック的な音をブラームスが「ブラームスらしく」アレンジした曲と言える。

「ブラームスらしさ」とは、わたしは低音の響きにあるのではないかと思う。交響曲第 1 番の冒頭もそうだが、そこにブラームスの世界観が秘められているような気がしてならない。

初めのうち、少しバラツキがありまとまりの無さを感じたが、寺岡氏らしく綺麗にまとめながら、曲を締めくくったという印象。

[2] エルンスト・フォン・ドホナーニ ピアノと管弦楽のための童謡主題による変奏曲

なぜ、この作曲家のこの曲が、「ブラームス探訪」と題した演奏会のプログラムに含まれたのか、演奏を聞き終えた今も、良く分からない。寺岡氏自身、「当初は、4回で考案しておりましたが、3回におさめるために少々窮屈になってしまいました。」とプログラムにコメントを寄せているので、4回のプログラミングであれば、もう少し意図も明確になったのかも知れない。

曲は、ファンファーレの後、静寂に包まれ、ピアノの演奏が始まる。ド・ド・ソ・ソ・ラ・ラ・ソ・・・ご存じキラキラ星のテーマだ。少し安っぽく感じてしまう。小学校などで、何度となく演奏する曲だからだろうか。

ある作曲家が、「作曲というのは、『上げれば下げる、下げれば上げる』ということの繰り返しで出来るんです。」と言っていたことを思い出す。それは、どこまでも音を上げ続けるということは半ば不可能なわけで、いい加減なところで、下げなければいけない。逆もしかり。

この言葉をそのまま当てはめた曲が、このドホナーニの変奏曲だったように思う。とてもシンプルな作りながら、美しいハーモニーが奥にある、全体としてはそんな印象を受けた。

ピアノは、オーストリア出身の若手ピアニスト。さすが音楽の本場で活躍しているだけあり、繊細な表現が素晴らしい。アンコールに弾いた「歌劇『こうもり』の序曲」は、オーケストラ演奏さながらといった感じで、とても素晴らしかった。

[3] ヨハネス・ブラームス 弦楽五重奏曲（弦楽合奏版）第2番

今日の演奏会の目玉企画。今日は、わたしの気持ちがブラームスに適していたのか、合奏版で聴いても、聴きごたえが十分にあり楽しめた。「弦楽五重奏」として聴きたいという欲求はあったが、それでもバランス良く、整った演奏だったように思う。第3楽章の後半あたりからは特に良く、「オーケストラが鳴っている」と表現されることがあるが、その表現どおりで、寺岡氏とオーケストラの息がピッタリ合っていた証拠だろうか。

また、ブラームスの世界観が良く表れたこの曲の神髄を踏まえ、うまく表現されていたことも、良い演奏となった理由の一つだろう。

[4] ヨハネス・ブラームス 11のコラール前奏曲から第7曲、第8曲

ブラームスのコラールから2曲。本来、コラールはオルガン用に使われた曲であるが、オーケストラ用に編曲したもので取りあげられたわけだが、プログラムに組み込む必要があったのか、やや疑問の残る演奏となった。

曲そのものは美しい響きで、厳かな教会音楽の世界が繰り広げられ、その精神世界をブラームスが描こうとした背景を考えると、とても奥の深い演目と言える。その本質は、やはりオルガンの音でのみ表わされるものなのかも知れない。

[5] おわりに

途中でも少しふれたが、本来、4回企画だったものを3回におさめたため、最終回のプログラムがやや窮屈になったことは事実だ。しかしながら、前の2回と比べると、今回は、とても充実した演奏会だったように思う。

ただ、寺岡氏とオーケストラの関係の良好さだけでなく、寺岡氏自身のブラームスへの対峙する気持ちの変化があったのかも知れない。ブラームスが暮らしたウィーンの町を拠点に活躍する寺岡氏だけに、この企画に取り組む中で、ブラームスの思いや考えに一步、二歩と近づいたものとわたしは確信している。

これまでスポットの当たらなかったブラームスの新たな一面を、是非、別の機会に披露してもらえることを楽しみにしたい。